

飲み飲みてわれのみぬちをのぼりおりするわれのゆく螺旋階段 屋良健一郎

酒を飲んでいると自分の体内にある螺旋階段を上り下りする感じだ、というのだろう。若いころ、私は酒を飲むとよく走りだしたくなり、あちこち走った記憶がある。酔った状態の表現はまだ未開拓の分野と思う。

冷え緊まる帯広畜産大学に友と飲みたる酒のよろしさ 水野利顕

何度か口ずさんでみると、固い名詞のひびきと一首をつつむ北海道の冬の空気とが独特の均衡をたもっていて、なんとも楽しい気分を味わわせてくれる。作中の「友」は帯広畜産大学の関係者で、彼を訪ねて、研究室とか宿舍とかでいっしょに酒をのんだのだろう。

今朝撮った七十二葉の鳥たちを一羽一羽と捨てていく夜 森部信次

朝、カメラかスマホで撮った野鳥たちの写真を、一枚一枚点検しながら、写りの悪いものを消去している場面。動きが速く、羽の広がりぐあいなど微妙なタイミングもあって、野鳥の写真はむづかしいのだろう。鳥好きの作者ならではの作。

完了か過去か聞こえず「か？」と問へば生徒ら笑ふ 六限古典 西澤孝子

一連を読むと、作者は女子高校の教員のようにである。他に「遅刻指導ぶつちぎつたやつ捕まへにテニスコートへ駆けてゆくなり」等、生徒だけではなく先生の方もなかなか活発で楽しそうである。引用作、教室の爆発的な

## 短歌の現在

### No.479 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

笑い声が読者にも聞こえてくる。

ビニールの結び目固く解けざりエクモ挿入セットを包みて 高橋 秀

「エクモ」は重症者用の人工肺。新型コロナ感染者が運ばれてくる現場で働く作者である。この作、まだ梱包されたままの器材をうたいつつ、緊迫したコロナ禍の時代の空気をリアルに伝えている。

陽が昇りロククダウンなき東京は何かを隠し動き始める 矢代朝子

新聞、テレビ、SNS等が、新型コロナウイルス感染症に関する無数の情報を流しつづけ、私たちは道のない森を歩かされているような思いである。未来のこと、本当のことは、私たちの視野の外側にあるのだろう。

内規にて自宅待機となるわたし濃厚接触者の札下げ 倉石理恵

「濃厚接触者」と判定された作者の感慨。感染者と認定された会社のだれかと濃厚接触したことなのだろう。希有な体験を短歌にした一首（これを書いた後で聞いたところでは、社の人は陰性だったとのこと）。

夕暮れの窓にOHTA氏映り込みドバイはランチャイムとなりぬ 菅野彰一

日本とドバイは時差が五時間。日本の夕暮れどきだがドバイのランチャイムになる。国の異なる何人かが参加したオンライン会議に取材して、時差をクローズアップした焦点の絞り方がいい。

それぞれの家の窓から西日射すZoomの画面越し